

宇都宮市域の石材産地を探る

池田 貞夫（宇都宮市文化財調査員）

川村 泰一（宇都宮市文化財調査員）

○はじめに

平成30年5月に、宇都宮市を代表する「大谷石文化」を核とするストーリーが、「日本遺産の認定」を受けて以来、大谷石のもつ歴史的文化的価値が高く評価され、内外から改めて注目されるようになった。大谷石文化は、長きにわたり大谷石を採石する営みと、それを利用することによって築き上げられてきた「地域独自の文化」であり、そこには自然環境や地質、歴史、民俗、美術、産業、建築、景観などが含まれており、幅広い分野を有する。このため遺産認定後、大谷石文化の研究と振興が図られつつあり、市民の期待は大きい。一方、観光面においても地域活性化を図る上で極めて有用な資源であり、現在、着実に観光客の誘致が進んでいる。

一方、大谷地区周辺の地域にも多くの石材産地があり、独自の石文化が花開いてきたことに注目する必要がある。これらの地域では古くから大谷石同様、軽石凝灰岩が採石、利用されてきたが、その多くは大谷石に包含され、独自のブランドが表に出ることは少なかった。また、歴史的にみても地域に住む農家が兼業として石材業を営み、地域で産出した石材を、日頃の暮らしに利用することが多かった。しかしながら、それぞれの産地の石材を見ると、地質年代や石の組成、性質は一様ではなく、個々の産地に特色があることが分かる。宇都宮市域の各産地では、産地ごとに数多くの石蔵や石仏、石塔、石祠などの石造物が造られ、独自の石文化が形成されてきた。

そこで本文では、これまでの調査を通じて確認できた、宇都宮市域における石材の各産地について、採石場の場所や採石が行われた年代、岩石の種類、石材の用途や代表的な石造物などを紹介したい。なお、石材の大半は軽石凝灰岩と呼ばれるものであるが、そのほかに熔結凝灰岩、角閃石デイサイトなどの採石、利用も見られたことから、それらを含めて記述する。

1 石材の産地と岩石の種類

(1) 石材の産地

市域の石材の産地は、主に市北西部の富屋、国本、城山地区、及び市街地北方に隣接する豊郷、戸祭地区である。地形としては山地や丘陵、台地（平地）に産地が見られる。具体的には北西部の篠井富屋連峰の東峰、飯盛山（標高501m）中腹では、『大網石』と呼ばれる赤味を帯びた石が採石された。また半蔵山（標高502m）や羽黒山（標高493m）から伸びる尾根の山々では、ミソを含まない、きめの細かい『徳次郎石』や『新里天王寺石』『新里寺沢石』が、その麓の平地ではミソや不純物を含む『新里熊之堂石』が採石された。

新里町西部の雨乞山中腹からは、黒い角閃石を含む『雨乞山石』が採石されたほか、その南に位置する雲雀鳥屋（標高362m）の中腹から麓にかけては、比較的きめの細かい『中野石』や『桜田石』が、また田下町の多気山（標高376m）の麓でも、やや青味を帯びたきめの細かい『田下石』が採石された。

大谷町の丘陵や平坦な場所からは、ミソを含む粗目の『大谷石』が大量に採石され、同町南側では細目の『大谷石』も採石された。その一方で、大谷町戸室からは、きめが細かくやや粉っぽい『戸室石』が採石された。大谷町北方に隣接した岩原町では、大谷石に類似した『岩原石』が、その北側の新里町岩本でも、ミソを含む粗目の『新里岩本石』が採石された。

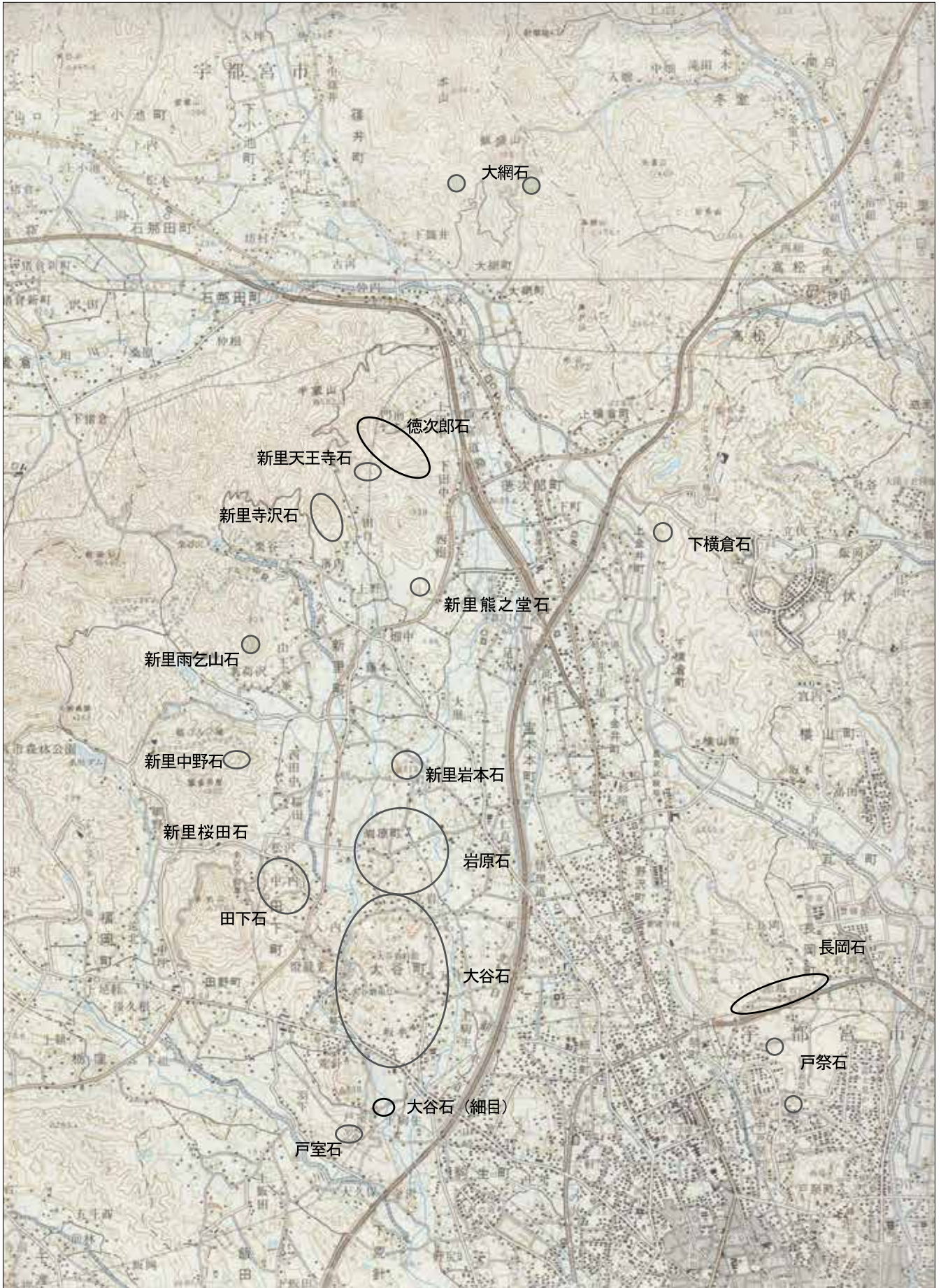
一方、市の中心部から北に伸びる宇都宮丘陵においては、下横倉町でミソや微細な石を含む、粗目の『下横倉石』が、南方の長岡町付近でも大谷石に近い粗目の『長岡石』が、中戸祭町付近でも同様の『戸祭石』が採石された。

(2) 岩石の種類

採石、利用された岩石の種類としては、火山の噴出物である火山灰や軽石などが水中で堆積し岩石となった『軽石凝灰岩』が主である。宇都宮大学名誉教授酒井豊三郎氏の見解によると、「大谷石」や「長岡石」の地質年代は1500万年前、「徳次郎石・桜田石・田下石」などは、それよりも古い1700万年前としている。

一方「大網石」は噴出物が落下中に熔結し、その後堆積した『熔結凝灰岩』で、地質年代は6000万年前としている。「雨乞山石」は角閃石を含む『角閃石デイサイト』としている。

地図：宇都宮市域の石材産地分布図（国土地理院5万分の1の地図（矢板・宇都宮）より作成）



2 大綱石

大綱石は大綱町を中心とした区域で採石された石で、桜石、赤石などの別称があり、採石場は2ヵ所確認できる。1ヵ所は大綱町で、飯盛山中腹の急峻な山沢にある。露出した大きな岩を垂直に切り取り、更に地下まで掘り下げている。もう1ヵ所は大綱町と篠井町（下篠井）の境界付近で、やはり飯盛山中腹に相当し、山沢の露出した岩を掘っている。採石は事業者が個々に行っており、石材産地としての規模は小さい。

採石が行われた年代は、明治期～昭和期（戦後）と見られる。岩石の色は赤味を帯びた小豆色で、その種類としては『熔結凝灰岩』とされる。

用途としては主に倉庫や納屋、石蔵などの建築用材に使われており、そのほか門柱なども見られる。代表的な建築物として宇都宮農協篠井倉庫があり、また篠井小学校の門柱も大綱石でできている。



写真1. 大綱石採石場跡（大綱町）



写真2. 大綱石サンプル



写真3. 大綱石積み石



写真4. 宇都宮農協篠井倉庫（昭和2年建造）



写真5. 篠井小学校校門（大正13年建造）



写真6. 大綱町の納屋

3 徳次郎石

徳次郎石は徳次郎町の西場（西根・田中・門前）の石山で採石された石である。この石山は男抱山（標高338m）の北西側の尾根に位置し、また半蔵山（標高502m）の南東斜面に伸びる。標高は約300m付近である。採石場は大きく5つのエリアがあり、その数は40ヵ所を超えるなど、一大採石場であった。自然の地形を利用した露天掘りを基本に、山の尾根に沿って石を垂直に切り下げているほか、大きな岩場をくり貫いた箇所も見られる。このほか、昭和期（戦後）に機械掘りした採石場では、地下深くまで掘り下げた跡が残る。

採石の歴史については、南北朝期創建の伝法寺の礎石に使われたという説や、亀井六郎茂清の墓と称せられる高さ90cmの五輪塔が現存することから、中世期に採石が始まった可能性もある。しかし、元号が刻まれた最古の石造物は、江戸初期の寛文4年（1664）で、この頃以降、農家の人々が農業を営みながら、農閑期に石工として働く、いわゆる「農間渡世」により採石、加工が盛んになったと考えられている。江戸期の文書「日光道中略記」や「天保巡見日記」には、徳次郎石の特徴や採石の場所、用途、採石に従事した石工の様子が記されている。江戸期から始まった採石は、明治、大正、昭和と、主として地元の人々によって採石、加工が行われ、平成2年まで続いた。なお、昭和39年～49年には日光石材株式会社が企業として、石材業に参入し、採石を行った。

徳次郎石は大谷石同様、軽石凝灰岩に含まれるが、地質年代は大谷石よりも古く、石の品質は異なる。色は白から青味を帯びたもの、やや茶褐色のものまでであるが、最大の特徴は、「粒子が細かく不純物がなく、きめが細かいこと」である。このため加工に向いており、石に粘りがあって加工しやすく、仕上がりが美しい。大谷石がカステラだとすれば、徳次郎石は餅に例えられるほどである。

徳次郎石の用途としては、建築物（石蔵、住宅、店舗、長屋門、納屋、味噌蔵、引き戸）を始め、屋敷構え（石門、門柱）、社寺石造物（石祠、鳥居、灯籠、山門、石仏、石塔、墓石）、土木用材（橋、石垣、土留め）、装飾用材（石蔵窓装飾）など、その用途は多彩である。特に、石蔵窓の彫刻装飾は逸品である。



写真7. 徳次郎石採石場跡①



写真8. 徳次郎石採石場跡②



写真9. 徳次郎石サンプル



写真11. 徳次郎石石蔵 (明治12年)



写真10. 徳次郎石張り石



写真14. 徳次郎石山門 (江戸期)



写真12. 徳次郎石石仏 (江戸期)



写真13. 徳次郎石窓彫刻装飾 (大正14年)

4 新里寺沢石

寺沢石は新里町の北東端、新里羽黒山（標高493m）から伸びる、通称土平山（標高371m・東西に2峰・小字地名寺沢）から採石された石である。土平山南斜面の中腹に、15ヵ所以上の採石場跡が残る。大きな採石場エリアでは、南北の尾根の片側を垂直に切り落とした採石場跡が7ヵ所連なっており、1ヵ所当たりの規模は幅10～30m、高さ10m～20m、奥行き10～25mに及び、長期間にわたって採石が行われたと思われる。また当該エリア北端の採石場跡には、採石した石を山頂から沢に下ろすための鉄索や鉄索塔、作業小屋跡などが残る。

採石の歴史については、地元住民によって江戸期から始まったようであるが、明治32年に野州人車鉄道（トロッコ）が敷設され、同社が採石、輸送に乗り出した経緯がある。この鉄道は戸祭－仁良塚－芳原間に設けられた8.8kmの軌道で、石材の運送を主目的としたが、戸祭で石材が滞り、販路の拡大ができなかった。明治39年、同社は宇都宮軌道運輸株式会社に吸収合併され、宇都宮石材軌道となり、同41年には戸祭－西原－鶴田と結ばれ、石材の輸送が促進された。しかし、大正13年に新里線は廃止となった。この間、鉄道会社によって寺沢石の採石が行われたが、当時の会社の事業内容は明らかではない。昭和期以降については、地元の事業者が採石を継続しており、石材は人々の生活用途に向けられ、昭和30年代まで続いた。

寺沢石は軽石凝灰岩であるが、地質年代は大谷石に比べやや古い。石の特徴としては徳次郎石同様、きめが細かく色が美しいが、同石に比べやや硬い。また少し不純物が含まれており、緑色の筋や縞模様が出る。

用途としては、徳次郎石同様、建築物（石蔵、長屋門、納屋、味噌蔵）のほか、社寺石造物（祠、鳥居、灯籠、石仏、石塔、墓石）、装飾用材（石蔵窓装飾）、門柱、橋など、多方面に利用されている。



写真15. 寺沢石採石場跡①



写真16. 寺沢石採石場跡②



写真17. 寺沢石サンプル



写真18. 寺沢石石蔵① (明治初期)



写真19. 寺沢石石蔵② (大正13年)



写真20. 寺沢石積み石

5 新里天王寺石

天王寺石は新里町の北東端、天王寺地区で採石された石である。天王寺地区は半蔵山の南麓、牛沢林道の入口に当たる。当該集落の東側に石山があり、この石山の山頂及び中腹から採石された。山頂の反対側は徳次郎石の採石場であり、採石場が隣り合っている。採石場は大小数カ所を数えるが、大きな採石場では切り立った大きな岩を垂直に掘った跡が残っている。また、山頂から見て西斜面中腹に、小規模な採石場が点在する。

採石の歴史については、地元住民によって江戸期から始まったものと見られ、昭和30年頃まで採石されたという。地元に住む荒川勇さん（80歳）によると、昭和30年頃は山で切り出した石を櫓（そり）で落とし、そこから馬車で運んだり、鉄索を設けて沢まで下ろし、麓で加工したという。

天王寺石採石場は、徳次郎石採石場と隣接していることから、地形・地質の基盤が共通である。このため石材の外観や材質は、徳次郎石とほぼ同様である。きめが細かくミソなどの不純物を含まない上、軟らかいという特徴を有する。

用途としては、建築用材（石蔵、納屋）や社寺石造物（石祠、鳥居、灯籠、石仏、石塔、墓石）、装飾用材（石蔵窓の装飾）、その他（門柱、橋脚など）に使われてきた。



写真21.
天王寺石採石場跡



写真22. 天王寺石石蔵 (明治15年頃)



写真23. 天王寺石門柱と石堀

6 新里熊ノ堂石

熊ノ堂石は新里町の北東、徳次郎町西根に隣接する山の麓から採石された石である。採石場は1ヵ所のみで、西根集落南端の国道293号線沿いにある。規模は小さく、露出した岩を垂直に切り出している。昭和期（戦前・戦後）に採石されたと見られる。石の外観、材質は大谷石に類似しており、きめが粗くミソや微細な石が混じる。

用途としては納屋や石塀、土留めなどに用いられたが、採石量が少なかったため、当該石を用いた現存物は少ない。



写真24. 熊ノ堂石採石場跡



写真25. 熊ノ堂石納屋



写真26. 熊ノ堂石サンプル

7 下横倉石

岩井堂石ともいう。下横倉石は下横倉町の北方、田川東岸の丘陵の麓で採石された石である。採石場は1ヵ所であるが、周辺に広がりがある。大きな岩を垂直に切り取っている。採石された年代は、明治期～昭和期（戦後）と見られる。石は軽石凝灰岩の一種で、大谷石に似て粗めでミソがあるほか、微細な石が混じる。このため石の細工には、手間がかかったという。用途としては、主に石塀や竈、土留めに使われた。



写真27. 下横倉石採石場跡



写真28. 横倉石石塀



写真29. 下横倉石サンプル

8 新里雨乞山石

新里町乙にある雨乞山（標高333m）の南側斜面中腹から採石された。採石場は1ヵ所確認できている。中腹の山沢に石がごろごろしており、露出した石の塊を、その場で一定の大きさに加工したと見られる。採石場跡には現在、様々な形の石が残っており、その中に角を整形した石やノミの跡と思われる石が散在している。

この石は角閃石、石英、斜長石を含む『角閃石デイサイト』で、特に黒い帯の角閃石が特徴的である。かつて「雨乞三影」といわれ、建築石材として採石された。明治期の第二次栃木県庁建築に際し、建造物（石積み）に使用されたといわれる。地元では護岸の石積みなどに使われた。



写真30. 雨乞山



写真31. 雨乞山採石場跡



写真32. 雨乞山石のノミ跡



写真33. 雨乞山石サンプル

9 新里中野石

新里町甲の中野地区から採石された石である。採石された場所は、雲雀鳥屋（標高362m）北側の尾根の中腹で、現在の鶴カントリークラブの北面に当たる。江戸後期から昭和30年頃まで、地元の事業者が露天掘りによって採石していた。この石の特筆すべき点として、大正5年(1916)～同9年(1920)の東京明治神宮の造営に際し、建造物の土台として使用されたといわれる。

軽石凝灰岩の一種であるが、大谷石に比べ全体的に緑掛かっており、耐火・耐震・防湿に加え、石の肌が細かく変色は少ない。ただし岩石の中に緑色の濃い筋や斑点（不純物）が混じる。

用途としては、建築物（石蔵、住宅、店舗）、屋敷構え（門扉、石塀）、土木用材（住宅造成、石垣）などに広く用いられた。



写真34. 中野石採石場跡（現ゴルフ場）



写真35. 中野石石蔵（大正期）



写真36. 中野石サンプル

10 新里桜田石

新里町甲の桜田地区から採石された石である。採石された場所は、雲雀鳥屋（標高362m）東側の山麓付近。採石規模はそれほど大きくなく、昭和30年頃まで地元の事業者が露天掘りで採石していた。

軽石凝灰岩の一種であるが、全体的に緑掛かっており、石の肌が細かく変色が少ない。色はきれいである。

用途としては、建築物（石蔵）などに広く用いられた。



写真37. 桜田石採石場跡



写真38. 桜田石石蔵（昭和29年）



写真39. 桜田石積み石

11 田下石

田下町多気山（376m）の北東山麓から採石された石である。東側山麓はなだらかな傾斜地が続き、広い範囲で長年採石が行われた。江戸期から地元の事業者によって、露天掘りで採石が行われたようであるが、採石が隆盛を極めたのは、昭和40年代から平成10年にかけての30年間である。昭和40年代以降、大谷石が建築用材として需要が急激に伸びたことに伴い、田下石を採石する事業者が次々に参入した。戦前は露天の石を手掘りで採石したが、この時代には採石の機械化と自動車輸送が進み、地下（坑内）掘りが主流となった。このため、石材の採石、加工、販売を行う事業者は田下町に8社を数えていた。しかし現在、操業を行っている事業者はない。

岩石は軽石凝灰岩の一種であるが、全体的に緑掛かっており、大谷石と異なり、きめが細かく変色が少ない。ただし不純物（微細な石など）が混じることが多い。

用途としては、主に建築物（石蔵）などに広く用いられた。



写真40. 田下石採石場跡①



写真41. 田下石採石場跡②



写真42. 田下石石蔵 (明治4年)



写真43. 田下石サンプル

12 大谷石

大谷町近辺で産出された石である。標高150～200mの丘陵に採石場が分布し、かつては露天の岩を手掘りで採石してきたが、後には地下掘りが主流となった。特に昭和30年代以降、地下深くまで入り込み、機械で採石を行い全国に出荷された。昭和48年には出荷高が89万トン（最大）になった。しかしその後、採石量、出荷高が減少し、令和2年には、0.7万トンにまで減少している。大谷石材協同組合の大谷石の採石業者は、現在5社（組合員6社）となっている。(本誌のP66 付録1 を参照のこと)

大谷石の歴史は古く、飛鳥時代に国分寺建立の際、石垣や土台石に使用されたと伝えられる。奈良時代から平安時代初期には、大谷寺の本尊である千手観音が洞穴石面に彫仏された。また、中世には宇都宮家累代の城主の墓が（五輪塔）が建立され、本多正純が宇都宮城主となった江戸時代には、城の改築に使用された。近代に入ると大正12年に旧帝国ホテルの外壁、内装に用いられ、昭和7年にはカトリック松が峰教会の建物に用いられるなど、大谷石は歴史遺産として燦然と輝いている。

岩石は火山から噴出した火山灰や軽石などが海底に堆積、固結したもので、一般に軽石凝灰岩と呼ばれる。その特徴としては、①軽い、②適度に軟らかい、③耐火性がある、④石材の表面が粗い、⑤ミソと呼ばれる異質物を含むなどが上げられる。特にきめが粗く、ミソを含むことから、土に近い石ともいわれる。

用途としては、建築物（石蔵、住宅、店舗、長屋門、納屋）のほか、屋敷構え（石門、門柱）、社寺石造物（石祠、鳥居、灯籠、山門、石仏、石塔、墓石）、土木用材（橋、石垣、土留め）などに広く用いられてきた。



写真44. 大谷石採石場眺望 (宇都宮名所絵葉書より)



写真45. 大谷石採石場跡 (ホテル岩)



写真46. 現大谷石採石場 (露天掘り)



写真47. 現大谷石採石場 (地下掘り)



写真48. 大谷石サンプル (粗目)



写真49. 大谷石サンプル (細目)



写真50. 大谷石細工



写真51. 大谷石教会



写真52.
大谷石石蔵



写真53.
大谷石長屋門

13 戸室石

大谷町の中でも戸室地区から採石された石である。戸室には戸室山（標高228m）があるが、主に戸室山南側の丘陵から採石された。明治期から昭和期頃まで、露天掘りで採石が行われたようである。

現在採石は終了しているが、採石した石を調査したところ、大谷石に比べ①色が白く、②きめが細かく、③砂が多く粉っぽく、④風化しやすいという特徴があることが分かった。

用途としては、石蔵、門柱、石塀などの建築物、構築物に使われた。採石場付近に、戸室石を使った明治期の石蔵が建っている。



写真54. 戸室石採石場跡付近



写真55. 戸室石石蔵（明治27年）



写真56. 戸室石サンプル

14 岩原石

岩原町から採石された石である。岩原町は大谷町と境界を接して地続きであり、地形、地質が類似している。平地及び地上から少し盛り上がった丘陵に、広範囲に採石場があり、大谷町と一体となった石材産地を形成した。

岩原石は江戸時代からの歴史があり、宇都宮城の石垣にも用いられたという。当初は農民が農閑期を利用して露天の岩場で採石を行う、農間渡世が一般的であった。その一方で大正12年、外部資本により「採掘権の取得と輸送用専用軌道の用地確保」が図られた。小林清一郎、次に中野新吾が当該事業に着手し、採石事業の拠点施設として、鹿沼駅前に「大谷石材中野工業所」が開設された。これによって、国鉄鹿沼駅－菊沢村－城山村－国本村（岩原）の軌道、8.7kmが敷設され、岩原石の採石、輸送が本格化した。しかし、採掘権を得た山が粗悪だったため、2年余で採掘は中止となった。こうした中、地元の事業者は採石事業を継続し、昭和期には地下から採掘するようになった。戦後は数社が地下から機械掘りで採石を行ってきたが、現在は1社のみ操業している。

当該石は大谷石と同時期に生成された軽石凝灰岩で、外観、材質は大谷石に似る。特徴は同石と比べミソがやや多いものの硬く丈夫なことである。このため用途としては、石塀、基礎石、土留めなどに多く使用された。



写真57. 岩原石採石場跡①



写真58. 岩原石採石場跡②



写真60. 岩原石狛犬・水盤・灯籠



写真59. 岩原石石材専用軌道跡

15 新里岩本石

新里町岩本の岩本山（標高212m）から採石された石である。大谷石区域の北端に当たり、岩原町と境界を接する。江戸時代から採石が始まり、最も盛んな時期は嘉永年間であったという。宇都宮城主の御用採石場（御止山）として石材を採掘し、宇都宮城築城の土台石としても使用されたといわれる。その後、明治、大正、昭和期と採石が行われ、平成期の初頭まで続き、現在は終了している。

大谷石と同時期に生成された軽石凝灰岩であるが、岩本石はミソが少なく硬く、そして耐久性があることで知られている。このため、同石は石塀や基礎石などに多く用いられた。



写真61. 岩本石採石場跡



写真62. 岩本石石垣



写真63. 岩本石サンプル

16 長岡石

長岡町近辺の丘陵から採石された石である。長岡街道沿いの北側の山林に、東西に方向に数カ所の採石場跡が見られる。特に大きな採石地は、長岡百穴古墳群西部周辺で、大きな岩場が切り取られ、平坦地になっている。

もともと長岡町には、市内最大級の古墳群である瓦塚古墳（6世紀後半）があり、また谷口山古墳もある。こうしたことから古墳時代、すでに石室として使われていたと見られるほか、竪穴住居の竈としても利用された可能性が高い。しかし、長岡石の採石が本格的に行われたのは大正時代中期以降という。長岡町の秋山要三郎が長岡百穴古墳群西部の良質な石目層に着目し、専門石工による採石を行った。太平洋戦争後、戦災復興や都市開発に伴い、大谷石同様、建物の基礎材として需要が飛躍的に伸びた。この当時、採石を行ったのは、大谷石などを手掛ける専門の業者で、大きな岩山を縦に、また横穴を設けて機械で採石を行った。定められて規格の石材をトラックで各地に輸送した。昭和35年頃になると、建築材としてコンクリートが使われるようになり、プロパンガスの普及によって石の竈の需要は激減した。さらに、採石の乱掘による石の質が追い打ちをかけた。このため、昭和35年頃には採石が打ち切られた。

当該石も大谷石と同時期に生成された軽石凝灰岩と考えられており、その特徴は粗目でミソがあるが、耐火性に優れる。しかし水にもろく、風化しやすいといわれる。このため、用途として良質なものは石蔵、納屋、倉庫などに、また大量に採石された時期には、竈や炬燵石、土留めの石積みなどに利用された。



写真65. 長岡石採石場
(昭和30年頃)
石渡重男氏 提供



写真64. 長岡石採石場跡



写真67. 長岡石石蔵 (農業用倉庫)



写真66.
長岡石サンプル



写真68.
長岡石石竈

17 戸祭石

戸祭山（標高182m）山頂付近の戸祭台と山本2丁目の境界辺りから採石されたほか、上戸祭町の長峰児童公園の傾斜地辺りからも採石されたようである。戸祭・山本石とも言っている。

戸祭石の歴史については、下戸祭1丁目の高麗神社境内に、『戸祭産石の碑』がある。これによると、「昔から戸祭石と呼ばれる白い石が採掘されていたが、しばらく途絶えていた。天保年間頃、坂本治平という人が開さくして盛んになったので、人々が開さく者・坂本治平の業績をしのんで碑を建てた」という。この碑から江戸時代に採石が盛んになった様子が窺えるが、その規模は小さく、その後も細々と継続してきたと思われる。

当該石も軽石凝灰岩の一種で、色は灰白色で軟らかく、加工しやすかったという。火に強く耐火性があったが、水に弱く建築材には不向きであった。このため、主な用途は竈などであった。



写真69. 戸祭石採石場跡遠景



写真70. 同左採石場跡近景



写真71. 戸祭産石の碑

○むすびに

宇都宮市域の石材産地は、大谷町の産地を除くとほとんどが採石を終了しており、かつて市域の石の産地がどこに存在し、どんな石が採石されたのか、どんな歴史があるのか、その石がどのように利用されたかなど、次第に不明瞭になりつつある。そこで今回、既存の文献や資料を参考にしながら、採石された産地を現地調査し、市域の石材産地とその利活用についてまとめを行った。しかしながら、本文はあくまで市域全体の石材の産地や石の種類、用途などについて、その概要、基礎資料を提供したに過ぎない。個別の石材産地に関しては、今後更なる調査・研究をする必要がある。

本文をまとめた結果、かつて市域には多くの石材産地があり、また産地ごとに石材に特徴があったこと、地元で採れる石を日常の生活に利用してきたこと、採石・加工業が地場産業になってきたこと、そして何よりも産地に石文化が息づいていることを、改めて認識した次第である。宇都宮市域で生まれ、育まれたきた地域固有の石文化を次代に継承するため、採石場跡を産業遺産として保存し、石造物の持つ新たな価値を再発見し、これを地域の有用資源として活用することが期待される。

主要参考文献

「石のまち大谷の文化的景観保存計画報告書」宇都宮市 平成20年

「国本の近代産業と人車鉄道」国本生涯学習センター 平成29年

「徳次郎石研究会活動成果報告書2020（令和2年度）」徳次郎石研究会 令和3年